

フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	新潟県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	村松町立村松小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数 26
学級数	3	3	3	3	3	3	1	19	
児童数	76	78	86	87	82	93	2	504	

研究の概要

1. 研究主題

自ら学び、基礎・基本を身に付ける子供の育成 ～コース別指導を取り入れた算数授業の工夫～
--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・ 4～6年生：算数 児童の理解度に差が出やすい教科であり、上学年になるにしたがい、児童の中で、算数に対する得意、不得意といった意識の差が広がるため。
--

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ「一人一人の学力を高めるコース別指導の工夫」</p> <p>仮説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コース別の目標を設定し、子供の実態に基づいた学習集団の編成と指導法を工夫するならば、一人一人の学力の向上を図ることができるであろう。 <p>研究方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4～6学年での習熟度を中心としたコース別学習の実施 ・ 各学年で児童の学力実態を把握し、それに応じた単元を選定し、コース別指導を行う。 ・ 単元のワークテスト、年度末の学力テストで児童の学力評価を行う。また、児童、保護者、担当教員からのアンケートや意見・感想から取組の評価を行い、成果と課題を明確にして次年度に臨む。 <p>研究内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コース別学習集団編成の工夫 ・ 少人数・コース別学習集団における指導法の工夫 ・ コース別学習集団に応じた教材の開発
--------	---

平成15年度	<p>テーマ「自ら学び、基礎・基本を身に付ける子供の育成 — コース別指導を取り入れた算数授業の工夫 —」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「自ら学び」とは、学習の対象に深くかわり、問題を解決するために学習意欲や思考力等の能力を駆使し、学ぶ楽しさや成就感を味わいながら問題解決に取り組む姿。 ・ 「基礎・基本」とは、学習指導要領に示される基礎・基本となる学力、及び、学習方法（学び方）、自己評価力等の学ぶ力 <p>仮説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コース別の目標を設定し、子供の実態に基づいた学習集団の編成と指導法を工夫するならば、一人一人の学力の向上を図ることができるであろう。 <p>目指す授業像</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子供の実態からコース別指導計画を作成しそれを基にコースに応じた適切な教材や教具を用い、指導法を工夫しながら行う授業。 ・ 一人一人の子供が学ぶ楽しさや成就感を味わいながら、基礎・基本を身に付けることができる授業 <p>研究方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4～6学年での習熟度を中心としたコース別学習の実施
--------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年で児童の学力実態を把握し、それに応じた単元を選定し、指導計画や教材等を吟味し、コース別指導を行う。 ・単元ごとのワークテスト、コース別自作テスト、CRT、NRTなどの学力検査、評価基準による評価、さらに児童、保護者、担当教員のアンケートや意見・感想から取組の分析を行い、検証する。 <p>研究内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コース別学習の単元への位置付けと単元の指導計画の作成 ・コース別学習集団における指導法の工夫 ・コース別学習集団に応じた教材の開発と評価 ・中学校との連携の在り方 ・自己評価カード、アンケートの作成と活用 <p>* 研究主題を上記のように変更した。学力の向上を図るには、主体的に学習に取り組む態度の育成と学力のとらえを明確にすることが大切であると考えたからである。そして、コース別指導の在り方を副題に設定し、コース編成、コースに応じた指導の工夫について研究に取り組むことにした。</p>
--	--

平成 16 年 度	<p style="text-align: center;">テーマ「自ら学び、基礎・基本を身に付ける子供の育成 — コース別指導を取り入れた算数授業の工夫 —」</p> <p>仮説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コース別の目標を設定し、子供の実態に基づいた学習集団の編成と指導法を工夫するならば、一人一人の学力の向上を図ることができるであろう。 <p>研究方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4～6学年での習熟度を中心としたコース別学習の実施 ・各学年で児童の学力実態を把握し、それに応じた単元を選定し、指導計画や教材等を吟味し、コース別指導を行う。 ・単元ごとのワークテスト、コース別自作テスト、CRT、NRTなどの学力検査、評価基準による評価、さらに児童、保護者、担当教員のアンケートや意見・感想から取組の分析を行い、検証する。 <p>研究内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コース別学習の単元への位置付けと指導計画の作成 ・コース別学習集団における指導法の工夫 ・コース別学習集団に応じた教材の開発と評価 ・中学校との連携の在り方 ・自己評価カード、アンケートの作成と活用 ・コース別授業を取り入れた授業の検証
--------------------	--

(3) 研究体制

<ul style="list-style-type: none"> ・研究主任とフロンティアティーチャーを中心とし、研究推進委員会（各学年1名）を組織する。また、全ての教員が4つの部に所属し、研究推進委員が各部のリーダーとなり、連携を図りながら研究を進めるようにする。 ・定期的に研究の推進について評価し合う会を設定する。
--

```

graph LR
    A[校長・教頭] --- B[研究主任]
    B --- C[研究副任 (F.T.)]
    C --- D["算数指導部  
教材部  
評価・調査統計"]
  
```

1. 研究の成果

コース別学習の単元への位置付けと単元の指導計画の作成

・4学年「円と球」の学習では、円の学習の後半と単元全体の後半部分の2回、コース別学習を設定した。その結果、基礎・基本の定着が図られた。ワークテストの結果は、学年平均が91点であり、全国期待値85点に比べ、6点上回った。コース別に見ると、コンパス(基礎・基本)コースが83点、円(基礎・基本)コースが89点、複雑模様(発展)コースが94点、発展コースが94点であり、円の理解が不十分な児童に対して、基礎・基本の定着がよく図られた。

コンパスコースは、少人数での指導による個別指導の成果が出て、編成前後のチェックテストにおける、作図問題(半径2cm、直径6cmの円をかく)の通過率は、(60% 80%、10% 90%)と向上した。

・下記に示した5年「図形の角」におけるコース別指導の位置付けも有効であった。

コース別学習集団における指導法の工夫

どのコースにおいても、既習事項を活用し、発展的に考えるように問題解決的な授業を構成し、基礎・基本となる操作技能や知識を身に付けさせることができた。

・5年「図形の角」の学習では、三角形、四角形の学習後、五角形から多角形の内角の和を発展的に考え求める授業を構成した。コースの実態に応じ、課題と教材を工夫することで、どのコースも既習事項を生かし、基礎・基本を活用しながら、五角形、多角形などコースごとの課題の内角の和の求め方を考えた。基礎・基本コースでも復習だけに終わらず、学習した事項を振り返らせながら、三角形、四角形の内角の和を使えば、未習の五角形の内角の和も求めることができ、基礎・基本の大切さを実感し、身に付けていくことができた。発展コースは、公式化して一般化まで行うことができた。

・コース別学習後、学級に戻り各コースでの学習の様子を紹介し合い、他のコースの学習の様子を知ったり、他学級のコースの新たなアイデアに触れたりし、多様な考えのよさに気付くとともに、どのコースも課題の違いはあるが、同じ学習をしているという共通認識を持たせることができた。

・この単元のワークテストの結果は、学年の平均点は88点。全国期待値に比べ7点上回っている。

コース選択への支援の大切さが明らかになった。

・コースを選択させるために、子供自身に何が分かったのか、何ができて何ができないのか明らかにする必要がある。そこで、学習内容(チェックテスト)、自己評価(振り返りカード)をもとにし、学習予定表を参考に、教師と家庭(学年たよりの活用)での支援により自己選択させる。教師は、子供の自己評価をもとに、適切なコース設定と個に応じた教材開発を行いコースを設定することができた。

コース別学習集団に応じた教材の開発と評価

映像による効果的な教材を有効利用できた。

・教材による動画クリップ(4年「円と球」)は、円の概念やコンパスの使い方を分かりやすくイメージ化することができ、概念理解を容易にすることができた。DVDビデオ形式で作成し、プレステ2による提示により、鮮明な映像、検索や操作性がよく、授業中だけでなく児童が容易に復習に利用することができた。また、6年「比」では、パソコンを用い、課題を視覚的にとらえさせることができた。

「ボックスファイル」に使用した教材を保存し、次年度以降も有効活用できるようにした。

ノートや学習の掲示物で既習事項を振り返り、解決の見通しを持たせる支援ができた。

他のコースで使用したプリントに挑戦するなど、学習意欲を高めることができた。

・他のコースで活用したプリントを廊下の机に並べておき、自主学習での取組を奨励すること

2. 今後の課題

自己評価力の育成

チェックテストの結果と自己評価の結果は、一致しないことがある。子供たちは、チェックテストを主な判断材料にコースを選択していた。自己評価力をさらに高める手だてが必要である。例えば、4年「円と球」で、子供のコース前の振り返りカードの記録と、コースごとの自己評価結果はチェックテストの結果より高い数値を示していた。分かったと自己評価しているが、チェックテストではできていない子供がいるのである。子供はチェックテスト結果を重視してコースを選択したと言える。

授業前の単元計画作り、指導中、指導後の評価のための打ち合わせ時間の確保

授業の検証を何を基にして行うのか明確にする。

評価の観点を明確にして、データなどの資料を基に評価を行う。

中学校との連携

学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力テストの実施

- ・ 3～6学年 NRT（5月実施）

前学年の学習の定着度を把握すると共に、成績を相対的に把握し、知能との相関関係から、特に、アンダーアチーバーに対する支援を積極的に行うための資料とする。

- ・ 全学年 CRT（2月実施）

絶対評価による到達度を明らかにし、児童の実態を把握する。また、結果を分析し、その後の指導改善の資料とする。

- ・ 3～6学年知能検査の実施（6月）

NRT 検査との相関を見ることにより、学習指導を行う資料とする。特に、アンダーアチーバーには、アンダーアチーバーを可能な限り少なくするように、教材等含めた指導内容を工夫し支援を行う。

- ・ 授業等についてのアンケート（6月、1月）

授業や家庭学習などについてのアンケート結果を授業改善に生かしていく。今後、6月と1月のデータを比較・検討する予定である。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 県学力向上フロンティア事業計画や学力向上フロンティアスクールにおける研究概要について、共通理解と研究の普及を図るために下記の会を開催した。

学力向上フロンティア事業町内協力校会議（平成 15 年 4 月 30 日）

場所：村松小学校 対象：村松町内小中学校

第 1 回拡大中学校校区指導主事訪問（平成 15 年 6 月 20 日（金））

場所：村松小学校 対象：拡大中学校区小中学校

新津・五泉地域 第 1 回地域協議会（平成 15 年 6 月 27 日（金））

学力向上フロンティア事業 2 年次中間発表（平成 15 年 11 月 21 日（金））

場所：村松小学校・愛宕中学校合同開催 対象：地域内の小・中・高、県内指定校

- 2 研究成果普及のために F.S たりやパンフレットなどを HP に掲載した。今後、各学年の研究の成果と課題等をまとめ HP に掲載する予定である。

- 3 村松町教育振興会算数部会と連携し、授業研究を中心に小・中学校合同で研修を行った。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	6学級以下 13～18学級 25学級以上	7～12学級 19～24学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T・Tによる指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	